没後200年 伊能忠敬を歩く

—36—

金沢八景
松並木の海岸線 今は昔

200年前に伊能忠敬らにより完成された「大日本沿海輿地全図」と現代の「地理院地図」を比べた時、まず気がつくのが海岸線の変化だ。特に、明治時代以降の都市化や工業化により埋め立てられた東京湾や大阪湾などでは、忠敬が測量した当時の浜の姿はほぼ失われている。

好例の一つが、横浜市南部から横須賀市北部へ続く海岸線だ。景勝地として知られる中国湖南省洞庭湖周辺の「瀟湘八景」にちなみ、江戸時代に「金沢八景」と名付けられた地。急な斜面が入り江のすぐそこまで迫り、浅瀬に浮かぶ帆掛け船や松並木は、歌川広重をはじめ絵師たちにとって格好の画題となった。明治維新後も政治家らに愛され、別荘を構えた伊藤博文はこの地で明治憲法を起草したと伝わる。

忠敬ら測量隊が同地を訪れたのは第2次測量の途上の1801年5月22日(旧暦4月10日)。「測量日記」によると、町屋村(現・横浜市金沢区)を早朝に出発し、村役人の案内で、野島や六浦を通り、浦郷村(現・横須賀市)に泊まっている。文末に「甚だ悪き宿なり」とその宿に触れられているものの、途中に目にしたであろう八景の描写はなく、極めて事務的な筆致が謹厳実直な忠敬らしい。

そんな「測量日記」に、「一覧亭」または「四方亭」という場所に上って測量し、昼食をとったと残されている。伊能図にも、その記載を見つけることができる。郡や村の名が並ぶ中、異彩を放つ。地理院地図と比べると、現在の野島公園(室ノ木地区)=横浜市金沢区六浦東1=の付近だ。9月中ごろ、周辺を歩いた。

京浜急行金沢八景駅前から国道16号を南に下ること約1キロ、横浜南共済病院の角を左へ入る。「瀬ケ崎本通り」だ。伊能図の側線と微妙に誤差はあるものの、「デジタル伊能図」(東京カートグラフィック・河出書房新社)を調べると、200年前は通り沿いに海岸線が走っていたとみられる。

広重の「金沢八景図」の一つ、「内川暮雪」はこのあたりの光景とされる。海辺に並んだ塩焼き小屋や雪に真っ白に彩られた遠くの三浦半島の尾根を広重は描いたが、令和の世では、狭い道の両側に住宅が建ち並ぶ。

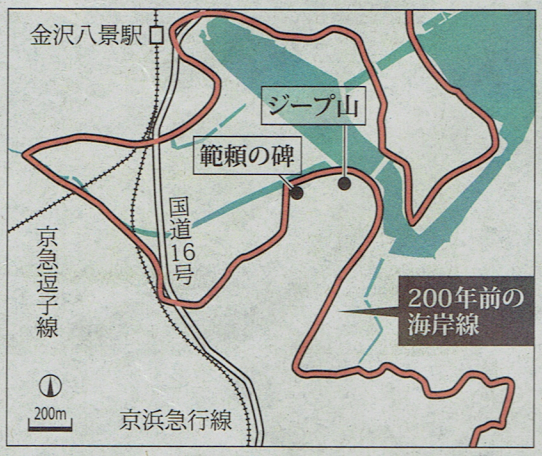
関東学院大のキャンパスの間を進み、侍従川に突き当たる角に、ひっそりと一つの碑が立っていた。1966年に開学80年を記念して建てられたもの。風雨にさらされ一部の文字は判読できないが、ここに源範頼の首が葬られたと伝わる。

遠江国蒲御厨に生まれたことから「蒲冠者」と呼ばれた範頼は頼朝の弟にして義経の兄。源平の戦いでは、頼朝の挙兵に応じて義経とともに軍を率いて上洛し、木曽義仲を討った。さらに一の谷、壇ノ浦で平氏を破り、九州に遠征したが、謀反の疑いをかけられ、1193年、伊豆の修善寺で頼朝側に殺された。

碑文によると、梶原景時に攻められた範頼は火を放って自害。灰の中から首は見つけ出され、頼朝の検分の上、埋葬された。人目にあまりつかない場所に立つ碑は、頼朝と義経という二人の英雄に挟まれたがために、数々の戦功を上げながらも地味な存在だった範頼を象徴しているようだ。

範頼の碑から川沿いに歩いてほどなく、緑に囲まれた野島公園(室ノ木地区)が見えてきた。足を踏み入れると、小さな丘があった。横浜金沢観光協会のウェブサイトによると、丘は「ジープ山」と呼ばれる。高さ10メートルほどながら、階段を上れば四方を一覧できる。

この頂に「一覧亭」はあったのだろうか。心地よい海風に吹かれながら、測量隊はひとときの休息を取ったのかもしれない。

【広瀬登、写真も】
=随時掲載

画面中央下に「一覧亭」の記載がある突起の先端部が現在の野島公園(室ノ木地区)。右の「烏帽子(えぼし)岩」は、海軍航空隊の飛行場建設のため切り崩されてしまった=国会図書館所蔵の「大日本沿海輿地全図」第93図より